

## 雪の思い出

### DEEP SOUTHに雪が降る

1月28日火曜日、今朝の天気予報では「チラチラと粉雪が舞う程度で積もる気配はありません」と言っていた。

昨日からアメリカ全土を大寒波が覆っていた。

今朝の散歩も気合が必要であった。何とか根性を出し完全装備で家を出る。

サラサラと粉雪が舞う。

すれ違う人もなく何時もの雑木林は鳥の鳴く声もなく、森閑としている。

表の道を時々車が行きかう音だけが聞える。

10分ぐらい過ぎるとステラとハナの身体が雪で白くなる。

ふっと、もしかしてこの雪積もるのではないか・・・

早く帰らないと車が動かなくなるのではないかと懸念が起きる。

それでも予定のコースの半分まで来たので、最後まで歩く事にする。

ここアラバマ、バーミングハムに雪が降るのは10年に一度ぐらいかもしれない。

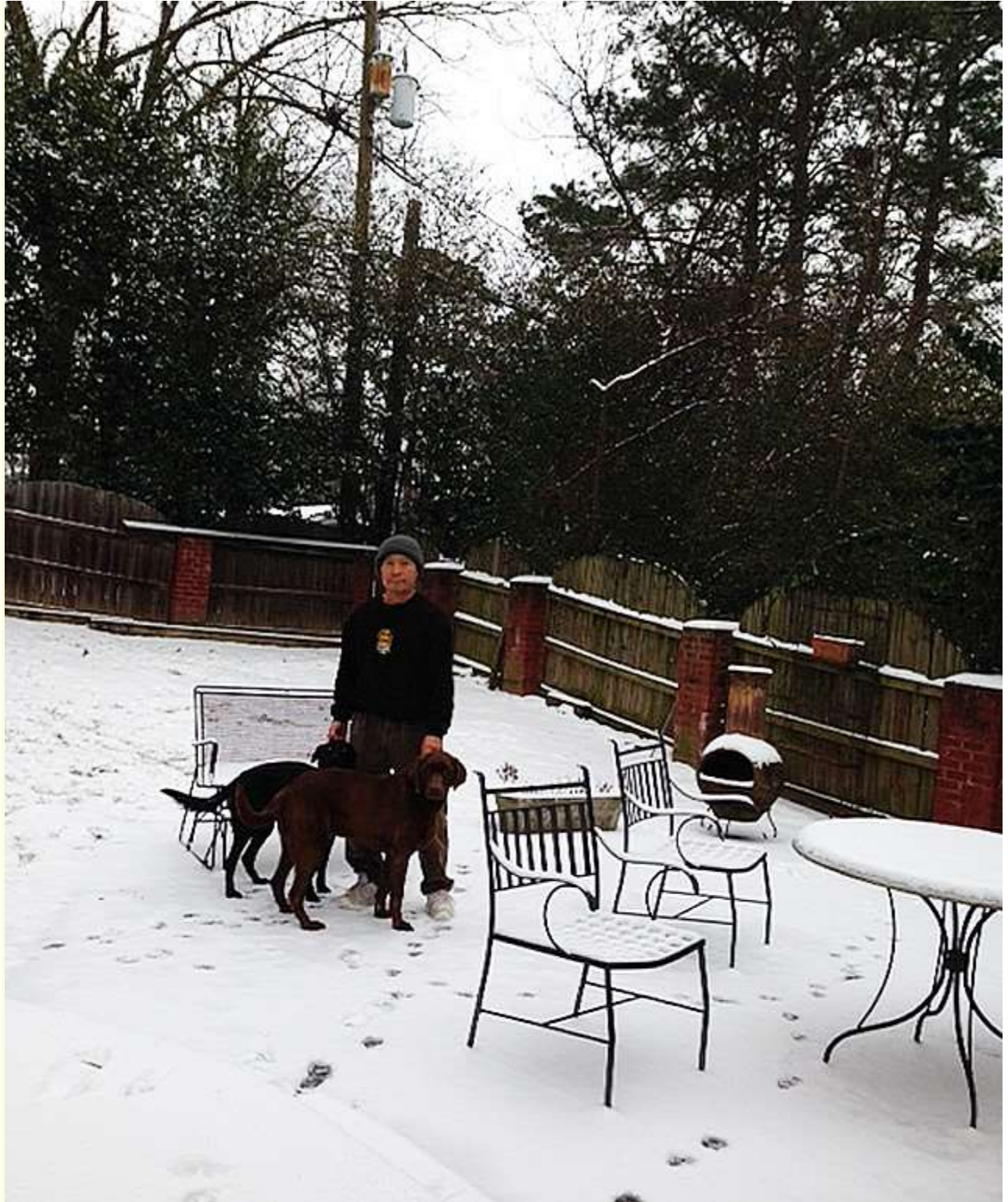
ちょっとの雪で街全体の動きが止まってしまう。

起伏にとんだ道が多いからである。

深南部 {デープサウス} の人は雪の中を運転する事に慣れていない。

パラパラと雪が降っただけでアチコチで事故が多発する。

雪が降る度にアラバマ自体の政治、経済、教育の活動が止まってしまうようだ。



何時も雪を見る度に思い出す事がある。  
遠い昔、まだ私が極真時代の出来事である。本当にあった事である。  
総主、茂兄がコネチカット州のフェアフィールドと言うところに道場を出した。

3月の中旬だったと思う。兄の大会か何かでシカゴから三浦、私も応援に駆け付けた。確かではないが、NYには午後着いたと思った。空港から直接道場に出向いて稽古をする事になった。兄の道場で私、三浦、その時の内弟子であった藤原、日沖、もしかして兄の息子テッドもいたかもしれない。皆で演武、型の統一、いろいろと和気あいあいと楽しい汗を流していた。

ふっと外を見ると雪が降り始めた。なぜか自然と気持が昂った。前にも言ったように、アラバマでは雪はなかなか見られないからである。兄の道場は商店街の一角にあった。我々が着いた時は、結構広いパーキング場には車が10台ぐらい止まっていた。私が兄に「雪が降り始めたよ、ソロソロ稽古終わりにしようか」と言う。兄も外を見てバカにした様な顔つきで、「お前ねえ、こんな雪は関係ないよ。アラバマと此処は違うんだよ」私の懸念は問題にしてもらえなかった。シカゴの三浦も微笑を向けていたようだった。二人の自信のある顔を見てそんなものかと思ったが、なんとなく不安であった。

また皆で稽古を続けた。それから少し時間が過ぎた。不安だったからも知れないが、自然と気持が窓の外に行ってしまう。また窓から外を見る。降る雪がもっと降り出したように感じた。パーキング場の車もいつの間にか2~3台になっていた。その止まっている車のタイヤの下が5~6センチ雪で隠れていた。表通りに走る車もなんとなく少なくなっている様を感じる。

私がまた兄に、「ちょっと大丈夫かよ？結構積もって来たよ」こんな感じで言う。兄も外を見て、「心配するなって、こんな雪は毎週降ってるよ、大丈夫だって」凄い自信であった。そうかと思ったが、でも心の中では不安が大きく膨らんだ。また稽古を始める。時間が経つ。気が乗らない。外はすっかり暗くなっていた。パーキング場のライトに照らされて雪がドンドン舞っている。止まってる車は2台だけである。そのうちの1台が兄の車である。何とタイヤが半分以上雪で隠れている。

前の大通りに何か戦車見たのが走っている。他の車は走っていない。「オイ、ちょっとあの戦車みたいな車、なに？」と兄に聞く。「オウ、オウ、あれか・・・うーん除雪車だよ・・・」そう答えて兄が外を見回す。その顔色がチョット曇った。いつの間にかパーキング場は兄の車だけになっていた。私が兄と三浦に「まだ大丈夫だろ？」と二人の顔色を窺う。兄と三浦が顔を見合わせ「うーん」と唸る。なぜか内弟子の藤原と日沖は沈黙である。私が「冗談じゃないよ、エッ腹も減っているし、汗をかいたんだからビールの時間だろ」兄が「うーん」と唸りながら出た言葉は何と「これはヤバイ」であった。

以下は私と兄との忘れられない会話である。

雪を見ると其の時の会話が甦ってくるのである。

「なに、お前は南部だから知らない、こんな雪心配ない・・・どうしたの、エッ！」

「うーん、そういわれても、もう遅い」

「フザケルナヨ、どうしてくれるの俺は内弟子じゃないよ、お客さんだよ、エッ」

「ヨシ、今なら大丈夫・・・」

「なにが大丈夫なの？」

「走って帰る」

「エッ、走って帰る、どこまで、エッ」

「俺の家まで、走って帰れば1時間チョットで着ける」

「この吹雪いてる中を1時間も走って帰れて言うのかよ、エッ！」

「それとも道場に泊まるか？」

「道場のどこにベットあるんだよ、マットに寝かせるのか！飯の用意、御馳走あるの？ビールは？・・・爆弾落とすよ、頭にくなぁー、本当に！エッ」

「たまあには、断食もいいかもしれないな」

「なに！断食！殺すよ！」

口から泡を飛ばして私は怒鳴ったようです。

結局我々は吹雪いてる中を走って兄の家まで帰りました。

きっと今だったら救急車を呼んでいるかもしれません。

到着の上にコートを着てバックを抱えながら走ったのである。

三峰の冬の合宿では長靴だったが、あの時はドレスシューズ革靴であった。

容赦なく降りしきる雪に、頭、顔、身体じゅうがビショビショになりました。

勿論走りながらも、兄を怒鳴り散らす事は忘れませんでした。

それでも若かったのか、元気だったのか知りませんが、兄の家に辿り着きました。

「珍しいな、こんな事初めてだよ、オイ、ビール飲むか？」

「当たり前だ、俺が一番先にシャワーを取る。旨いつまみ用意しておけよ」

「オケイ、任せろ...サー機嫌を直して」

・・・雪を見ると何時もこの思い出が甦ってくる。

それだけこの思い出は強烈であった。

ちなみに道場を出る時兄の車はドアの半分まで雪がつもっていた。

先生マサがメールで「東京も雪が降りそうです」と言ってきた。

みんな気を付けて。

先生直井滑って転んで頭を打たないように。構え忘れるな！

もうすぐ3月春季講習会再会楽しみです。

健康第一 オス